

# 明治期における溝口家の道具移動史

宮 武 慶 之

## 論文要旨

江戸時代を通じ溝口家は新潟新発田を中心とした下越地方を治めた。歴代藩主は文芸や茶の湯に親しんだため、多くの道具を所蔵した。それらの道具の大半は明治三七年の売立およびそれ以前の個人取引で流出した。溝口家の売立目録は確認されていない。調査により松山喜太郎（一八三六—一九一六）による『つれづれの友』を息子・米太郎（一八七〇—一九四二）が写した写本の存在を確認した。『つれづれの友』には溝口家の売立に関する記述があり、この点から当時の周縁を明らかにする。

本稿では筆者のこれまでの調査から美術品の移動とそれに関係する人物の関係、溝口家の当時の家政状況などを明らかにした。調査により溝口家の道具流出は当時の当主であった溝口直正の意向と次女・久美子の輿入れも関係していることが判明した。明治期の溝口家のコレクションの大半が流出する点を明らかにすることができれば近世大名家の道具流出の実態の一例を溝口家においてみるることができるものと考ええる。

キーワード【溝口直正、新発田藩、つれづれの友、高橋箒庵、売立】

## はじめに

江戸時代を通じ溝口家は新潟新発田を中心とする下越地方を治めた。新発田藩は六万石の外様大名で、藩祖は溝口秀勝（一五四八—一六一〇）である。新発田における領主は明治維新を迎えるまで溝口家であった。歴代藩主は文芸や茶の湯に親しんだため多くの道具を所蔵した。溝口家は今日でも評価の高い美術品を収集した。それらの道具の大半は明治三七年（一九〇四）の売立および、それ以前の個人取引で流出することとなる。溝口家は主要な道具を所蔵した家であるにもかかわらず、その実態調査が進んでいない。

筆者は新発田市立図書館における文書調査から溝口家の蔵帳四件を明らかにした。これらは『御掛物帳』、『新発田御道具帳』、『江戸御道具帳』、『七間之御土蔵御道具帳』の以上の四件である。近年に至るまで、これらの蔵帳の存在は『溝口伊織家古文書』<sup>1)</sup>に紹介されるも、今日まで調査がなされることはなく、内容を知ることができない

かった。蔵帳の存在から溝口家の所蔵した道具の全貌が明らかとなる。筆者によるこれまでの研究では蔵帳に所載される道具の追跡調査を実施し、合致する作品を紹介してきた<sup>3)</sup>。

溝口家の所蔵した多くの道具は、明治期以降に財政上の理由から売却され流出することとなる。道具売却のため、溝口家は明治三七年(一九〇四)に東京、両国にあった料亭の中村楼において売立を行っている。通常、売立ではモノクロ図版入り(図版がない目録もある)の出品目録が作成される。これまでの調査では溝口家の売立目録は確認されていない<sup>3)</sup>。調査の過程において松山喜太郎(一八三六―一九一六)による『つれづれの友』を息子・米太郎(二八七〇―一九四二)が写した写本の存在を確認した。松山は井上馨(一八三六―一九一五)の知遇を得て、井上家の蔵番をした人物である。これまで高橋箒庵(一八六一―一九三七)が『大正名器鑑』<sup>4)</sup> 編纂時に資料として活用した抄録本が慶応義塾大学に所蔵されているが、原本写本の存在はこれまで不明であった。『つれづれの友』には溝口家の売立に関する記述があり、この点から当時の周縁を検討できるものと考ええる。

溝口家の所蔵した道具は個人取引によっても流出した。明治三〇年(一八九七)前後に溝口家と個人取引をした人物では高橋箒庵がおり、同家所蔵品の伯庵茶碗《宗節》、《保元時代香合》、啓書記筆《山水図》など五〇数点を入手している。しかし、その具体的な作品や、ほかの個人取引および美術品の移動とそれに関係する人物の関係

当時の溝口家の家政状況など、先行研究では明らかにされていない。

本研究の調査によって溝口家の道具流出は、当時の溝口家当主であった溝口直正(一八五五―一九一九)の意向と次女・久美子の興入れも関係していることが判明した。明治期の溝口家のコレクションの大半が流出する点を明らかにすることができれば近世大名家の道具流出の実態の一例を、溝口家においてみる事ができるものと考ええる。

本稿ではまず、これまでの調査をもとに溝口家歴代藩主のコレクションの概観を述べることとする。次に明治期における溝口家の道具流出を明治三七年(一九〇四)の売立、明治三〇年(一九八七)前後の個人取引、溝口直正家の状況および久美子興入れといった観点から明らかにする。

#### 一 溝口家所蔵品の概観

これまでの調査から判明した事項を中心に、ここでは歴代藩主についてそのコレクションの概観を述べてみたい。

まず藩祖である秀勝は古田織部(一五四四―一六一五)から贈られた《織部杳茶碗》(個人蔵、図1)を所持した。秀勝は慶長八年(二六〇三)一〇月五日昼に行われた織部の茶会に客として招かれている<sup>5)</sup>。『大正名器鑑』には茶碗本体と収納する箱の図版が所載されている。茶碗を収納する箱の甲には「伯州様 古田織部」と織部

による自署があるとされる。溝口家の茶道具蔵帳である『新発田御道具帳』には「織部杳茶碗 箱書御宛名」とあり、伯州とは秀勝が伯耆守と名乗ったことによるものである。同蔵帳には秀勝が豊臣秀吉（一五三七―一五九八）から拝領した釜も所載されている。秀勝は、秀吉没後に所用の刀装を譲り受け、その拵は『朱塗金蛭巻大小』（東京国立博物館蔵）として同家に伝来した。

二代藩主の宣勝（一五八二―一六二八）は新発田藩京都御留守居、西川瀬兵衛重勝（生没年不詳）に依頼して承応元年（一六五二）、藤谷為賢（一五九三―一六五三）が所持した藤原定家墨蹟を譲請している。

三代藩主の溝口宣直（一六〇五―一六七六）は小堀十左衛門政貴（一六三九―一七〇四）との交渉があった。これは溝口家における土用の虫干しの際に宣直が所蔵した茶杓の筒と中身が入れ違いとなり、利休の作か遠州の作か判別できなかつた。そこで左衛門にみせたところ、父の宗甫（遠州）作であると見分けたことに宣直が感心したという。宣直と茶の湯の関係を考えるとき、宣直は片桐石州（一六〇五―一六七三）の茶会に招かれた記録がある。これは萬治三年（一六六〇）二月二十七日、晩で溝口出雲守、修理（宣就）の父子が招かれている。

溝口家の茶の湯において特に著名なのは四代藩主の重雄（一六三三―一七〇八）である。重雄は怡溪宗悦（一六四四―一七二四）に茶を学び、石州流の茶を学んだ。重雄の茶の湯では陸

奥仙台藩四代藩主の伊達綱村（一六五九―一七一九）と交流があり、溝口重雄、重元親子は元禄十一年（一六九八）四月晦日に、伊達家江戸邸において行われた綱村の茶会に招かれている。重雄は將軍家の御庭方の縣宗知（一六五六―一七二二）とも交流した。宗知は重雄との交流から新発田における清水園や五十公野御茶屋の造営にも関与した。そのため宗知は新発田を訪れている。宗知との交流で特筆すべきは、宗知が小堀家から借金の質に預かつた小堀家伝来の道具五種を、小堀家の借金返済が難しくなつたため、重雄に譲渡したことである。重雄に譲渡された五種の道具とは古瀬戸茶入『溝口胴高』（個人蔵、図2）、瀬戸茶入『蛭』（畠山記念館蔵）、瀬戸茶入『大概』（個人蔵、図3）、《閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟》（個人蔵、図4）、《青磁四方香炉》である。五種の道具を入手したことにより溝口家は遠州所持の名物道具がコレクションに加わることとなる。なお現在、宗知による譲状（図5）は『溝口胴高』に付属する。

八代藩主の直養（一七三六―一七九七）は文芸を好み、俳諧をよくした。小林忠氏の『江戸の絵画』によれば北尾政一による『芸妓図』は直養の惚れ込んだ芸妓であつたが、姿を忘れぬよう讃文を書き、手元に置いたとされる。ただ、掛物の蔵帳である『御掛物帳』での所載は確認することができなかつたが、同家が所蔵したものと考えられる。

十代藩主の直諒（一七九九―一八五八）は茶の湯を嗜み、新発田藩茶道の阿部休巴（一七八五―一八五三）から皆伝を受けた茶人

であった。直諒は隠居後、江戸木挽町の幽清館において過ごした。ここでは小堀宗中(一七八六—一八六七)、芳村観阿(一七六五—一八四八)、古筆了伴(一七九〇—一八五三)らと茶の湯を通じた交流があった<sup>12)</sup>。そのため多くの書画や茶道具を収集した。そのうち主要なものでは大燈国師墨蹟《日山之賦》(個人蔵、図6)がある。本墨蹟は田山方南による『禪林墨蹟』において紹介されるが添状の存在については明らかにされていなかった。筆者の調査により墨蹟に付属する添状一〇件を明らかにし、そのうち溝口直諒入日記から同人愛蔵の一軸であることが判明した<sup>13)</sup>。このほか溝口家が所蔵した茶入では《徳永肩衝》(図7)がある。この茶入は後述するように明治三七年(一九〇四)における売立まで溝口家が所持した。茶入の銘の由来となった徳永とは、美濃高須藩初代藩主、徳永寿昌(一五四九—一六一二)が所持したことに因むとされる。寿昌の子である昌重(二五八一—一六四二)と、その子である昌勝(一六〇五—一六五四)は寛永五年(一六二八)に所領であった五万三千七百石を収公されておられ、昌勝は新発田の溝口宣勝のもとに預けられ蟄居した。その後、慶安元年(二六四八)に昌勝は許され、二千俵を与えられ寄合に列する。昌勝の正室は溝口宣勝の娘であり、その縁故もあつて溝口家が入手したものと考えられる。

以上が溝口家歴代当主のコレクションの概観である。このほかに溝口家旧蔵の作品は伝雪舟筆《四季山水図巻》(京都国立博物館蔵、重要文化財、図8)、《長生殿蒔絵手箱》(大倉集古館蔵、重要文化財、

図9)、蘭溪道隆墨蹟《法相》(個人蔵、図10)、小堀遠州作共筒茶杓《式部卿様まいる》(北村美術館蔵)などがあり、今日でも美術品としての評価の高い作品が含まれている<sup>14)</sup>。

## 二 溝口家の道具移動

ここでは先ず、新発田藩の藩主と將軍家における献上と下賜についてみてみたい。というのも江戸時代には將軍家に対し、刀剣や茶道具は献上の対象となった。これらは致仕、家督相続、遺物の献上等によつて移動がみられ、一部には返献もある。そこで溝口家歴代藩主の記録と『徳川実紀』から下賜と献上についてみたものが【表1】となる。表から藩祖秀勝が豊臣秀吉から陣羽織や遺物として来国光の刀が下賜されていることがわかる。先述の通り釜や刀装なども下賜されており、溝口家において重宝とされたものと考えられる。

將軍家への献上では新発田藩藩主の家督相続、隠居、致仕の際においてなされている。これらは刀剣、馬、巻物、時服などである。一部には御台所、簾中御方に和歌集を献上している例がある。これは寛永三年(二六二六)七月二十八日、四代重雄が致仕する際、將軍家に城州兼永の刀、御台所に冷泉大納言爲尹卿筆の古今和歌集、大納言殿に備前重眞の刀、簾中御方に冷泉大納言持爲卿筆の後撰和歌集を献上した。この献上以外はすべて刀剣、馬、時服などによる。溝口家が歴代を通じて將軍家へ献上した作品には茶道具やそのほかの美術

品の献上は記録上みられない。すなわち溝口家が江戸時代を通じて収集した道具は同家で所蔵されていたこととなる。このほか他の大名への譲渡、家臣などへの下賜が想像されるが、主要な道具類は、そのまま明治期まで溝口家が所蔵したと考えられる。溝口家の道具の大半が流出するのは明治期以降である。ここでは明治期における溝口家の売立と、個人取引が判明した高橋箒庵、原三溪の道具購入、および溝口直正家の周辺について論じることとする。

i) 溝口家の売立

溝口家の売立については『近世道具移動史』の「溝口伯家蔵品」に以下のよう記述がある。<sup>15)</sup>

明治三十七年六七月頃かと覚ゆ、溝口伯家にては江東中村楼に於て其蔵器を入札売却に附せられた、今度の入札会に出た中興名物瀬戸蜚茶入、同胴高茶入、時代扇面散らし蒔絵手箱は何れも抜群の逸品であった。而して彼の時代蒔絵扇面模様手箱は溝口家の親戚たる大倉喜八郎男が買取して大倉集古館に納めたが、大正一二年の大震災にも幸に類焼の難を免れて、今尚ほ再築の同館に現存して居るのは誠に目出度き次第である。

記述では明治三十七年(一九〇四)に東京両国の中村楼において売立を行ったようである。しかしこれまでのところ売立に際して作成される売立目録の存在は確認されていない。そのため、売立の状況について判明している三件の作品についてみてみたい。

溝口家の売立において出品された作品では《蜚茶入》、《胴高茶入》、《時代扇面散らし蒔絵手箱》がある。これらは瀬戸茶入銘《蜚》(崑山記念館蔵)、古瀬戸茶入銘《溝口胴高》(個人蔵、図2)、《時代扇面散らし蒔絵手箱》は現在、大倉集古館に所蔵される《長生殿蒔絵手箱》(図9)である。<sup>16)</sup>以上三件は明治三十七年(一九〇四)の同家売立に出品したことが判明する。溝口家の売立において売立目録の存在を考えるにあたり都守淳夫の『売立目録の書誌と全国所在』

(二〇〇二)によると、それには所載はない。明治三十七年(一九〇四)当時の売立では益田克徳家の売立があるが、目録がモノクロ図版入ではなく、出品作品を文字だけで記述したものであった。<sup>17)</sup>溝口家における売立目録もこのような文字だけの目録であったことが推測される。いずれにせよ、明治三十七年(一九〇四)の溝口家の売立において他の出品作品については全貌が明らかではない。

売立目録の調査について、現在、出光文化福祉財団の研究助成を受け、目録調査を実施している。調査の過程で『つれづれの友』(写本、個人蔵)の存在を確認した。本書は松山喜太郎(二代目吟松庵)の手記『つれづれの友』を息子である米太郎(二代目吟松庵)が書写した写本である。同書には明治三十七年(一九〇四)の溝口家に売立についての記述がある。そこで先ず本書の周辺について触れておくこととする。『つれづれの友』について高橋箒庵は『萬象録』第七卷、大正八年(一九一九)二月八日条において以下のように記述している。

〔松山青柯つれづれの友〕

加賀の人故青柯老、遺子米太郎の所蔵茶書一覽を請ひ置き昨日高橋梅園を遺はせしに、青柯自筆つれづれの友と題する記録十冊及び雪間草を借り来れり。つれづれの友は青柯が加賀、東京、大阪等にて茶会に招かれたる其述記と、諸名家にて一覽したる道具又は各地入札会に出でたる高値付等の記録にして、其綿密驚くに堪えたり。加賀と東京の売買されたる道具の出所、価格等を明細に書付たるに依り、大いに参考と為るべき者あり。一覽の際、必要となる者の上に朱圈を施し、名器鑑編輯所にて書写せしむる事と為せり。

筆者の松山喜太郎について、中村作次郎の『好古堂一家言』によれば、松山は金沢の人で上京して後に井上馨(一八三六—一九二五)の知遇を得て、井上家の蔵番となった人物である。また道具商でもあった。『つれづれの友』とは喜太郎が諸家での拝見録や加賀前田家売立や井上世家、鴻池家の道具帳などの記録を手記としてまとめたものである。なお中村によれば『つれづれの友』は息子・米太郎により出版の計画があったようであるが、今日その存在が確認できていない<sup>18)</sup>。松山が所持した道具を『大正名器鑑』においてみてみると、井戸茶碗『古今』、唐物茶入『唐大海』、唐津片口茶碗『離駒』(現在、個人蔵)<sup>19)</sup>がある。

高橋自身も『大正名器鑑』編纂時に必要部分を書き写して活用した。『大正名器鑑』中にある『つれづれの友』はその抄録本をさす<sup>20)</sup>。

現在、抄録本は慶応義塾大学の高橋箒庵文庫に所蔵されるが、原本またはその写本となる文書の存在はこれまで確認されずにいた。今回の調査から写本の存在が明らかとなった。現存が確認されたのは『つれづれの友』の写本一五冊である。内訳は喜太郎による見聞録九巻、井上蔵帳二巻、茶会記二巻、それと索引二巻である。本文中、朱書きがあるが、これは息子・米太郎による書き込みである。本書には嘉永七年(一八五四)から明治四三年(一九一〇)までの記録が存在し、当時の道具移動史を知ることができる重要な資料であると考<sup>21)</sup>える。『つれづれの友』には明治三七年(一九〇四)に行われた溝口伯爵家の売立についての記述があり、箒庵による『近世道具移動史』以外の文献記録として存在することは貴重である。『つれづれの友』(図10)には以下のような記述がある。

明治三十七年四月十一日 溝口家入札

札元 梅沢 池田

赤星

一名物 胴高茶入

千四百十八円

鈴安

馬越

一同 螢

千三百五十八円

山澄

赤星

一同 大瀬戸徳永<sup>レ</sup>

千五百三十円

池田

赤星

一	両筆墨蹟	千八百十円	鈴安
一	雪舟 龍虎屏風 一双	千円	小山
一同	中三聖三幅対	六百五十円	
益田			
一	探幽 禅月模羅漢三幅対	六百円	
一	宗甫所持江月三不点茶箱	四百円	
	刷毛目茶碗入 ケンドン蓋		
	見込ぬけず底あり		
一	守景 紅白牡丹双幅	二百十七円	池田
一	祥瑞 在名蜜柑上りあり	三百十円	中村
馬越			
一	相阿弥筆 君臺観	百二十八円九十銭	山澄
井上			
一	瓢 炭斗 石州書付	三十三円三十三銭	
	一 交趾黄鹿香合 <small>蓋に疵 黄立ち上りよし</small>		
	一 青磁柿香合 胴合 下手疵有り		
	一 古法眼三幅対 <small>中琴高 左右通覽</small>	千三百円	
	一 青磁四方香炉 <small>蓋付 蓋紋二重蓋有り 書付利体の由</small>		
	一 鎌倉時代扇蒔絵手箱		
	以上凡三萬円余		

（『つれづれの友』巻十）

記載順は、喜太郎の手記である性格上、関心のあった作品のみを記述する。興味深いのは落札した道具商および判明しうる所有者が書かれている点である。下部には落札した道具商、上部脇には落札者の名が記される。

先述の『近世道具移動史』における高橋の記述によれば、溝口家の売立は明治三十七年（一九〇四）五月から六月ごろまたは四月とされていたが、松山の記述から明治三十七年（一九〇四）四月一日に開催されたことが判明する。次に札元には梅沢、池田の二名の名前がある。梅沢とは梅澤安蔵（一八五四—一九三三。号は鶴叟、渋柿庵）のことである。梅澤は鈴木屋の屋号で鈴安と呼ばれ、山澄力蔵、伊丹新太郎とともに東都を代表する道具商であった。<sup>(22)</sup>

池田とは池田慶次郎（生没年不詳）のことである。ここで池田慶次郎と箒庵の關係について触れておきたい。『萬象録』には池田の名前が度々登場する。齋藤康彦氏によれば同書中に一七二回登場し、茶会等には全く登場しないが、道具商の首位であるとしている。同書の記述から池田は高橋家出入りの道具商であり、道具の鑑定、あつ旋などの状況が判明する。<sup>(23)</sup>そこで『美術商の百年』に所載される売立記録から池田が札元となった会をみてみると大正七年（一九一八）から大正一〇年（一九二一）に集中しており、そのころが池田の道具商として活動した最盛期であると考えられる。<sup>(24)</sup>池田は後述する高橋箒庵の所蔵品売立である六回の売立のうち、高橋家御蔵品入札（大正七年）、水戸徳川家音羽護国寺並二某家御蔵品入札（大正十年）

の二回において札元となっている。

池田と溝口家との関係について、明治三十七年(一九〇四)の溝口家の売立以後、池田は同家所蔵品を箒庵に持ち込んでいた点が挙げられる。『萬像録』には大正四年(一九一五)一月三十一日に溝口伯爵家の所蔵品である一尾伊織茶杓銘《山姥》を箒庵が三五円で買い取る条や、同年二月七日には溝口伯爵家所蔵の裂類、印籠、煙草入など約三〇点を持参して箒庵にみせている条がある。<sup>(26)</sup>このことから池田は明治三十七年(一九〇四)の売立以後も溝口伯爵家に入出し、同家所蔵品の売却に関与したと考えられる。明治三十七年(一九〇四)の溝口家売立に際してもう一人の札元である梅澤は当時、東都における道具商の実力者であった。この売立の札元として参加させたのも、池田だけではなく、梅澤を札元に据えることで、客層を拡大させ、売上を増収を図ったものと考えられる。ただ、高橋箒庵が『近世道具移動史』において述べるように、

然るに溝口家は道具売却の巡り合わせが悪く、不思議に景気の悪い時に売却せらるゝやうに為つて居るが、今回も遼陽戦を前にして国内の人心競々たる折柄であつたから、斯る名品が入札市場に現れたるにも拘らず、好事家の顔が殆ど場中に見えないと云う有様であつた

とあって、溝口家の道具売却時期は日本が戦時中という事もあり、時局の買い控えをする景気感と重なつたようである。そのため、明治三十七年(一九〇四)の売立では落札価格も芳しくなかつた状況が

想像される。

出品された作品をみてみると《蚩》、《胴高》(すなわち溝口胴高、図2)、《両筆墨蹟》(すなわち閑極法雲・東澗道順両筆墨蹟、図4)、《青磁四方香炉》については小堀家から宗知を経て溝口家が入手した《大概》(図3)を除く、同家の主要な茶道具であつた四種がこの売立において流出していることが判明する。このほかでは、二代藩主宣勝の娘婿であつた徳永昌勝が所蔵した《大瀬戸徳永》(すなわち徳永肩衝、図7)や、《鎌倉時代扇蒔絵手箱》(すなわち長生殿蒔絵手箱、図9)も流出している。<sup>(27)</sup>

『つれづれの友』に所載される一七件の旧蔵品の落札価格の総額は一万七五五円二三銭である。ほかの出品作品中、松山の記録に留まつていない点からみると、作品としても価格的にも同書に主要なものが列記されたとみて差し支えない。総額が三万円程度であることから残り約二万円分の道具が出品され、その金額も千円をはるかに下回る金額であつたことが推測され、多数の道具が流出したことになる。以上から『つれづれの友』により溝口家売立および道具流出の状況が判明した。

ii) 個人取引による道具移動

① 高橋箒庵の場合

『近世道具移動史』には溝口家の道具流出について、個人取引について述べられている。同書では以下のような記述がある。



溝口家は越後新発田藩主で、文政頃号を翠濤と云はれた好事の主人あり、彼の観阿白醉庵を寵遇し茶事に執心にして盛んに名器を買収せられたので、各般の什器が潤沢であったが明治三十年前後より個人取引で他に譲られた点数も少からず、三十五年頃余も亦同家の道具五十余点を一手に譲り受けた事あり、其中には伯庵茶碗、保元時代扇面杜若模様香合、啓書記筆李白觀瀑等の名品を含蓄して居た、併し同家の蔵器は中々多数で、右の如く度々個人売却を行はれた後にも尚夥しき名器あり

記述から、新発田藩十代藩主、直諒(号、翠濤)が収集した道具などは溝口家に存在した。これらの道具は明治三〇年(一八九七)前後から個人取引により売却された。特に明治三五年(一九〇二)には筆者の高橋箒庵自身も書画および茶器等五〇数点を購入したようである。その中には《伯庵茶碗》すなわち伯庵茶碗銘《宗節》(泉屋博古館分館蔵)、《保元時代扇面杜若模様香合》すなわち《扇面時絵香合》(根津美術館蔵)、啓書記筆《李白觀瀑》などがあつた。箒庵による『大正名器鑑』に所載される丹波焼茶入銘《紅葉》もこのときの譲渡品の一つである。<sup>29)</sup>

後年、箒庵は自身の所蔵品の売立を行っている。その売立は東都寸松庵主所蔵品の入札(明治四五年)、高橋家御蔵品入札(大正七年)、徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品入札(大正一五年)、一木庵高橋家蔵品入札(昭和五年)の四回がある。

ところで水戸徳川家および某家との合同売立である水戸徳川家

音羽護国寺並二某家御蔵品入札(大正十年)がある。この売立における某家とは高橋箒庵家である。というのも現在、東京美術倶楽部には原三溪の書簡(原富太郎筆、梅沢安蔵宛)が所蔵されており、この売立が水戸徳川家と高橋箒庵家による売立であることが述べられている。このほか箒庵の売立では、内田家と某家の売立である内田家某家所蔵品入札(昭和七年)がある。某家とは平戸藩主松浦家と高橋箒庵家の二家をさす。よつて以上六回の売立が箒庵の売立となる。<sup>30)</sup>このうち徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品入札には溝口家旧蔵品と紹介されるものや蔵帳等と合致する作品はみあたらない。徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品の入札以外の売立目録をみると、溝口家の旧蔵品は作品五六件が該当する【表2】<sup>31)</sup>これらは箒庵が『大正名器鑑』で述べる溝口家から直接取引により入手した「道具五十余点」の道具であると考えられる。

## ②原三溪

伝雪舟筆《四季山水図巻》(京都国立博物館蔵、図8)は原三溪(二八六八—一九三九)の愛蔵品であつた。この《四季山水図巻》について、三溪自身の記録では『美術品買入覚』(第三冊)があり、以下のような記述ある。<sup>32)</sup>

一金五千五百円也 鳩居堂より買入  
大燈墨蹟 馬遠山水 雪舟真山水長巻  
雪舟破墨山水巻

このとき鳩居堂を介して購入した作品は《大燈墨蹟》、《馬遠山水》<sup>(33)</sup>《雪舟真山水長卷》、《雪舟破墨山水卷》である。さらに三溪自身による詳細な記述は『三溪帖(草稿)』がある。この草稿は、三溪が自身のコレクションを一冊の図録としてまとめ、解説付きで出版しようとしたものである。しかしこの草稿は出版には至らなかった。画像等の掲載も予定されたそうであるが、その画像も現存していない。草稿の記述では、『四季山水図巻』について、以下のような記述がある。<sup>(34)</sup>

第三十七図

山水長卷 雪舟筆

(中略)

此巻溝口家ノ旧蔵ニシテ明治「欠字」年

余ノ有二婦セリ

総テ蒐集ニ付テハ因縁トモ云フ可キモノア

ルヤニ思ハル 如何ニ馳恋苦心モセサル

ニ何時カ自分ノ手ニ入り来ルモノトアリ 此雪

舟長卷ノ如キハ曾テ溝口家ノ所蔵大燈

国師墨蹟(第「欠字」図)ヲ京都ノ展観ニテ一

見シタルカ恋々忘ルル能ハス 其後溝口家

ニテ此ヲ譲ルノ意アリト聞キ京都鳩居堂主

熊谷氏同家ニ就テ其墨蹟ヲ仲介シ呉レタル

トキ徳明「値段」ノ彼レ此レヨリ偶然此長卷モ伴イ来

レリ

記述を整理してみると、京都の展覧会において大燈国師墨蹟が展示してあった。この墨蹟を三溪は恋々として忘れることができなかった。その後、溝口家の意を受けた京都の香具商、鳩居堂が仲介し三溪に譲渡したようである。このとき一緒に譲渡の話が持ち上がったのが雪舟筆《四季山水図巻》である。記述にある京都の展覧会とは古美術展覧会であると考えられる。<sup>(35)</sup> 明治三十六年(一九〇三)に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会は事実上日本で初めての万国博覧会となった。京都でも関連の行事である古美術展覧会(京都美術協会主催)が開催された。<sup>(36)</sup> この展覧会では旧儀である茶道や華道など一六式を古儀旧典により古美術品を用い再現した。展示を通じて旧儀の紹介と国内外への普及を目指したものであった。業務を委託されたのが京都美術協会である。なお旧儀の発案者は鳩居堂主人の熊谷直行(一八四三—一九〇七)である。展覧会の様子が収められた『旧儀裝飾十六式図譜』には越後新発田の伯爵溝口直正による濃茶席の様子(図12)が紹介される。<sup>(37)</sup> 当日、濃茶席で使用された掛物は「掛物 大燈国師墨蹟 物我両忘」である。原三溪による購入品の目録である『三溪帖目録』(三溪園保勝会蔵)には

一 物我両忘五言律詩 一枚

大燈国師書

とあり、大燈国師による物我両忘の五言律詩の墨蹟であることが判明する。さきの『文化情報学』では、古美術展覧会に出品された大燈

国師墨蹟《物我両忘》(個人蔵、図13)を紹介した。<sup>(38)</sup>三溪による記録から、個人蔵本と合致する。

原三溪の草稿では、当初、溝口家は大燈国師墨蹟《物我両忘》の売却先について熊谷氏を介して探していた。三溪は熊谷氏から話をもちかけられたとき、雪舟の《四季山水図巻》の売却もあつたことから購入したことが書かれる。その後、大燈国師墨蹟と《四季山水図巻》は鳩居堂を介して原三溪が入手した。このほか『美術品買入覧』(第三冊)には明治四一年(一九〇八)に熊谷氏から購入した溝口家旧蔵品として酒井抱一筆《秋草鶉図》(山種美術館蔵)や酒井抱一筆三幅対《野花螳螂、波上明月、水草蜻蛉》(崑山記念館蔵)を入手している。これらの溝口家所蔵品の譲渡は、先の『近世道具移動史』にもあるように明治三〇年(一八九七)前後から道具を個人取引によって売却した一例であるといえる。

### 三 明治期における溝口家の流出の背景

最後に、溝口家の所蔵した道具が流出する時期の当主である溝口直正について触れておきたい。溝口直正は新発田藩二代目の最後の藩主で、明治政府では伯爵に叙任されている。<sup>(39)</sup>直正は謡曲、詩文、書画、植物栽培などの趣味があつた。<sup>(40)</sup>

溝口家において財政面における問題点は、明治二四年(一八九二)に藩士、中村谷五郎より貸付、立替金七万余円について返済の訴訟がおこっている。<sup>(41)</sup>この訴訟についての詳細は判明していない

が、金銭的に余裕がなかった事が推測できる。また、明治二二年(一八八九)、次女の久美子と大倉喜七郎(一八八二—一九六三)との結婚があり、いくばくかの支出があつたと考えられる。

このような家政状況のため、溝口家は所蔵する道具を売却したのではないだろうか。明治三〇年(一八九七)前後には高橋箒庵や原三溪への個人取引による譲渡があつた。先に紹介した古美術展覧会は熊谷直行が主となつて開催された。古美術展覧会に出品された溝口家の所蔵品の一覧が【表3】である。雪舟筆《四季山水図巻》や大燈国師墨蹟《物我両忘》が原三溪に譲渡されている点から古美術展覧会は関西方面において溝口家の所蔵品を公開するとともに、その売却先についても販路を求める場所であつたことが推測される。溝口家と鳩居堂熊谷氏の関係を示す資料はないものの、熊谷氏はその仲介役であつたと考えられる。その後、明治三七年(一九〇四)には溝口家は売立を行っている。

当時における道具の流出では明治二二年(一八八九)、溝口久美子が大倉喜七郎への興入れの際に持参した《松竹梅時絵十種香箱》(図14、大倉集古館蔵)がある。なお久美子の弟であり、溝口家の分家である溝口武五郎家の養子となつた溝口三郎(一八九六—一九七三)によれば《扇面時絵懸子》(同館蔵)も溝口家の伝来品とされる。<sup>(42)</sup>溝口家の旧蔵品は同家の入札における《長生殿時絵手箱》の落札や久美子の興入れ道具などから大倉家に所蔵されることとなる。<sup>(43)</sup>このように明治期における溝口家の家政状況として明治二二年(一八八九)

に溝口久美子の輿入れ、明治二四年(一八九一)には借財返済を求め提訴され、その後、明治三〇年(一八九七)前後には個人取引、明治三七年(一九〇四)に売立を行うこととなる経緯をみる事ができる。

#### 四 結び

溝口家は個人取引により道具が流出した。個人取引では高橋箒庵、原三溪の取引が確認できた。箒庵の場合は溝口家と直接交渉し、池田慶次郎が間接的に関係した。また、明治三七年(一九〇四)の溝口家売立以後も高橋箒庵は溝口家の旧蔵品を池田慶次郎を介して購入している。溝口家の道具流出は池田を介して売却されることがあったものと推測される。

三溪については鳩居堂の熊谷氏を介して購入した当時の状況を明らかにすることができた。原三溪は京都の古美術展覧会において一覽した大燈国師墨蹟《物我両忘》を熊谷氏を通じて入手するが、溝口家は売却先を探していた。このことは当時の溝口家が古美術展覧会への出品を足がかりに関西方面での売却先を求める内覧の意味があったと考えられる。

その後、明治三七年(一九〇四)に売立を行っている。売立の状況は松山喜太郎による『つれづれの友』を、息子・米太郎が自筆で書写した写本が存在しており、同書に溝口家の売立記録が所載されることで、周辺を明らかにすることができた。同書の存在により出品

作品一七件が判明した。このとき、溝口重雄が縣宗知を介して入手した小堀家伝来の茶道具五種の内、四種の瀬戸茶入《蛸》、古瀬戸茶入《溝口胴高》、《閑極法雲・東澗道洵兩筆墨蹟》、《青磁四方香炉》が流出する。このほか溝口家と関係の深い徳永家が所持した古瀬戸茶入《徳永肩衝》も流出する。

維新後の大名家は財政上の問題を多く抱えたが、溝口家の場合は訴訟や久美子の輿入れなどが重なり、出費がかさんだため家財の売却を行ったものと推測される。当時の大名家全般についてもいえることであるが、財政上の理由で自家蔵品を売立や個人取引により売却した。溝口家の場合は、借金返済の訴訟を起こされ、財政的にも緊迫した状況があった。

今後の研究課題は溝口家における世襲財産の検討である。溝口家の世襲財産では土地、有価証券については判明するが、世襲財産法で定める付属品として美術品や家宝の登録の有無については明らかにできておらず、今後、調査する必要がある。<sup>(4)</sup>

#### 謝辞

本稿執筆にあたり調査に協力いただきました個人のご所蔵家、大倉集古館、根津美術館、売立目録の調査に協力いただきました東京文化財研究所、文献調査にご協力いただきました同志社大学ラーネット記念図書館、画像掲載にあたりご協力いただきました京都国立博物館、瀬津雅陶堂、京都美術倶楽部、クリスティーズ・ジャパン株式会社 に感謝します。

主要参考文献

- 溝口三郎遺稿集刊行会編『溝口三郎遺稿集』（溝口三郎遺稿集刊行会一九八六年）
- 高橋義雄『大正名器鑑』（アテネ書房 一九九七年）
- 高橋義雄『萬象録』（思文閣出版 一九八六—一九九一年）
- 高橋義雄『近世道具移動史』（有明書房 一九九〇年）
- 熊谷直行、猪熊淺磨『旧儀裝飾十六式図譜』（京都美術協会 一九〇三年）
- 京都美術協会『古美術展覧会出品目録』（京都美術協会 一九〇三年）
- 東京美術倶楽部百年史編纂委員会『美術商の百年』（東京美術倶楽部 二〇〇六年）
- 小林忠『江戸の絵画』（藝華書院 二〇一〇年）
- 齋藤清『原三溪 偉大な茶人の知られざる真相』（淡交社 二〇一四年）
- 都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覽』（勉誠出版 二〇〇一年）
- 野村瑞典『翠濤侯遺芳集』（岡仙吸古堂 一九八八年）
- 新発田市史編纂委員会『新発田市史』上下（新発田市 一九八〇—一九八一年）
- 『茶道聚錦』第一〇巻（小学館 一九八六年）
- 展覧会図録『原三溪と美術』（三溪園保勝会 二〇〇九年）
- 展覧会図録『雅』（瀬津雅陶堂 二〇一三年）
- 展覧会図録『小堀遠州の茶会』（根津美術館 一九九六年）
- 展覧会図録『京華』（京都美術倶楽部 二〇一二年）
- 図録『茶美の会』（茶美の会 一九八五年）

付記

本研究成果は平成二六年度、出光文化福祉財団研究助成（宮武慶之、財津永次「売立目録所載の墨蹟図版データベース構築と筆跡の検討」）に

よる。

附録

- 【表1】 溝口家所蔵品における下賜品と献上品
- 【表2】 高橋箒庵の所持した溝口家旧蔵品
- 【表3】 溝口家が古美術展覧会に出品した作品

〔図の典拠〕

- 図1、図7 『大正名器鑑』より転載
- 図2、図5、図11 撮影筆者
- 図3 図録『茶美の会』より転載
- 図4 図録『小堀遠州の茶会』より転載
- 図6 図録『京華』より転載
- 図8 京都国立博物館による画像提供
- 図9、図14 大倉集古館による画像提供
- 図10 図録『雅』より転載
- 図12 『旧儀裝飾十六式図譜』より転載
- 図13 CHRISTIE'S IMAGES LTD.2013

註

- (1) 新発田古文書解説研修会・新発田市立図書館編『溝口伊織家古文書』目録第一集、新発田市古文書研修会・新発田市立図書館、二〇〇四年。
- (2) 宮武慶之「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化情報』

- 学』第九卷第二号、二〇一四年、五七―一二二頁。
- (3) 都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』(勉誠出版、二〇〇一年)には溝口家の売立は所載されていない。
- (4) 市野千鶴子『古田織部茶書』第二巻、思文閣出版、一九八四年。
- (5) 高橋義雄『大正名器鑑』第八編、アテネ書房、一九九七年、一八七頁。
- (6) 前掲註(2)『新発田御道具帳』中、「御釜之部」には以下のような記述がある。  
 乾坤入  
 一 太閤方拝領之御釜
- (7) 横谷一子『「隔冥記」にみる一町人の文芸と古典受容』、『仏教大学大学院紀要』第二七号(仏教大学、一九九九年、一四三頁)には以下のような記述がある。  
 定家墨蹟の掛物を宣直に届けるため大阪に赴く。
- (8) 世田谷区立郷土資料館『続石井至毅著作集』(世田谷区教育委員会、一九九二年)に所収される旗本・石井至毅による『当流聞書口伝』には以下のような記述がある。  
 溝口信ノ守殿ニ而十左衛門殿茶杓目利ヲ御頼、宗甫と有之にせて利休と有之ハ宗甫ニ而候と被申候、是ハいつか土用干に筒ニ入違へて有しを能見分給ふとて感心有し也
- (9) 酒井巖『伊達綱村茶会記』(中央公論事業出版、一九六八年、三三三頁)には以下のような記述がある。  
 (四月)晦日朝 教寄屋 四畳半  
 溝口信濃守殿 溝口伯耆守殿  
 桑山志摩守殿 牧野監物殿
- (10) 宮武慶之「閑極法雲・東潤道洵両筆墨蹟について」、『アート・リサーチ』第一四号、立命館大学アート・リサーチセンター、二〇一四年、八九―一〇四頁。
- (11) 小林忠『江戸の絵画』藝華書院、二〇一〇年、一四二頁。
- (12) 前掲註(6)。
- (13) 宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟について―物我両忘と日山賦を中心に―」、『文化情報学』第九卷第一号、二〇一三年、九九―一一二頁。
- (14) 前掲註(2)および(6)。
- (15) 高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂、一九二九年、一四八―一五〇頁。
- (16) 大倉集古館において閲覧したところ、手箱の甲には金蒔絵および銀箔の蒔絵が施される。扇面の蒔絵には藤掛松、桔梗、菊、撫子の図がみられる。蓋裏には長生殿春秋の文字がみられる。
- (17) 『根岸益田克徳翁遺愛品売立台帳』、個人蔵。
- (18) 中村作次郎『好古堂一家言』(中村好古堂、一九二七年、二二五頁)によれば松山喜太郎について以下のような記述がある。  
 井上侯の御道具掛をして居た人に、加州の道具屋で松山喜太郎という人がありました、好事の人でしたから平常見聞した書画道具類を一一記録し又は看取りして、徒然の友と題する遺稿が数十巻あります、子息の米太郎氏はそれを整理して出版せらるゝとか申すことです、遺稿の内には百万石と題する加州侯の売立目録や世外侯道具御蔵帳、鴻池の道具附とか、茶会記のよなもの色が色々あります。
- (19) 松山喜太郎は以下の道具を購入し所持したが、その後、売却している。《古今井戸》(『大正名器鑑』第七編、アテネ書房、一九九七年、一五五―一五六頁)、《唐大海》(同書第二編、一四一―一四二頁)、《離駒》(同書第三編、一四一―一四二頁)。

(20) 高橋義雄『萬象録』第七卷、思文閣出版、一九八六年、二月八日条参照。

(21) 売立に関していえば、『売立目録の書誌と全国所在一覧』でも明らかのように、所収される目録の初見は明治三七年の益田克徳の売立である。しかしそれ以前にも売立は行われており、たとえば明治三年には雲州松平家の売立などがある。『つれづれの友』が貴重な点は、その間の売立の記述があり、当時の道具移動史を検討することとを可能にする点にある。

(22) 飯田國宏氏により洪柿庵・梅澤安蔵の紹介がなされる。『東美ニュース』第五二号参照。

(23) 齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク』、思文閣出版、二〇二二年、一一〇頁。

(24) 前掲註(20)では大正八年における池田慶次郎と箒庵についての交渉は以下のようになる。

一月二日 池田、霞茶碗写を持参し、箒庵これを買取る。

一月二五日 池田、彫刻者を帯同し、扁額を持参する。

一月二七日 池田、のんこう作赤茶碗銘旭光を持参し、箒庵二五〇円で買取る。

三月一日 箒庵、池田、春海東京支店一名を帯同して池田忠博邸に行き、同家売立に出品する皿鉢、楽器などを検分する。

三月三日 池田、川部利吉旧蔵の東山時代松竹梅蒔絵錫緑香合を持参し、箒庵それを買取る。

三月一七日 箒庵、池田を伴い池田侯爵邸に赴き、売立に出品する刀剣の検分をする。

(25) 東京美術倶楽部百年史編纂委員会編『美術商の百年』(東京美術俱

楽部、二〇〇六年)において所収される売立のうち、池田が札元として参加した売立は以下である。

大正七年 三月一八日 稲葉子爵平岡家御藏品入札

大正七年 四月五日 高橋家御藏品入札

大正七年 四月一八日 松平男爵家御藏品入札

大正七年 一〇月三日 松井子爵家御藏品入札

大正七年一〇月二日 徳川侯爵家御藏品入札

大正八年 三月二日 橋場青地家御藏品入札

大正八年 六月二日 因州池田侯爵家御藏品入札

大正八年 一月二四日 郷男爵家御藏品入札

大正九年 二月二日 某旧家御藏品入札

大正十年 一月二八日 水戸徳川家音羽護国寺並二某家御藏品入札

大正十年 二月一九日 茂木家旧御藏品入札

(26) 高橋義雄『萬象録』(第三卷)大正四年一月三一日条の(一尾伊織作茶杓銘山姥)には以下のような記述がある。

池田慶次郎一尾伊織の茶杓銘山姥を持参す。溝口伯爵家の所蔵品の由、筒に山姥とありて茶杓に夕月の二字を彫りたり、是れは筒と茶杓と代わりたるにあらずやとの懸念にて三十五円なりといふ。されど作者の考にては謡曲山姥の中に、「夕月早きかげろうふの」と云ふ文句あるに因り、茶杓に夕月の二字を彫りたるなるべし、茶杓に雲の如き模様ありて山姥の舞扇に用ふる月の雲の模様と似寄りたるどころあり、山姥の銘は蓋し是より起りたるならん、此茶杓は確に掘り出し物なりと思はる。

また、同書の大正四年二月七日条には以下のような記述がある。

池田慶次郎、溝口伯爵家の切れ類、印籠、煙草等入、二、三十点

を持参せり

ただし、このうち一尾伊織茶杓は溝口家の茶道具蔵帳である『新発田御道具帳』には所載がない。

(27)

『つれづれの友』(個人蔵)において、出品された作品には以下がある。  
 ・雪舟筆《中三聖三幅対》は、現在、東京国立博物館に所蔵される伝雪舟筆三幅対《虎溪三笑図》であると考えられる。なお、鷹田其石による模写も同館が所蔵する。

・探幽筆《禅月模羅漢三幅対》は、『国華』一八一号に「釈迦十六羅漢図三幅対 溝口直正氏」と紹介されており合致する。

・宗甫所持《江月三不点茶箱》とは、小堀遠州が所持した茶箱である。記述によると江月三不点とある。江月三不点とは、「天不晴不点、湯不老不点、不得其人不点」を意味する。

・《瓢炭斗》には石州書付があり、この炭斗は井上馨が入手している。井上家の売立目録『井上侯爵家御藏品入札』(大正一四年)中には同一と考えられる炭斗が所載されている。

・古法眼三幅対《中琴高、左右蓮鷺》は外狩素心庵『雙軒庵美術集成図録』(統)(九州電気軌道、一九三三年)に「元信 中琴高仙人 左松尾長鳥 右蘆鷺 三幅対 溝口家伝来」と紹介されており合致すると考えられる。

(28)

この香合は高橋箒庵が所持してのち、根津嘉一郎の所有となつた。京都美術倶楽部『京華余芳』(京華余芳刊行会、一九三九年)によれば根津による濃茶席において用いられている。同書所載の図と現在、根津美術館が所蔵する《扇面時絵香合》は合致する。

(29)

『大正名器鑑』によれば丹波焼茶入銘《紅葉》の箱書は、縣宗知による。収納する箱の甲に「紅葉」、裏には宗知により  
 嵐吹く大江の山の紅葉はハ生野にをれるにしきなるらむ

と書かれる。この歌は『後拾遺和歌集』所載の俊盛法師による。『大正名器鑑』編纂時の所有者は筆者の高橋箒庵である。

(30)

これら六件の売立目録は、すべて東京文化財研究所蔵本による。

『東都寸松庵主所蔵品』請求記号、美研—0162

『高橋家御藏品入札』請求記号、美研—0309

『徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品入札』請求記号、美研—1077

『一木庵高橋家所蔵品入札目録』請求記号、美研—1357

『水戸徳川家首羽護国寺並二某家御藏品入札目録』請求記号、美研—0759

0759

『内田家某家所蔵品入札』請求記号、美研—1485

(31) 高橋箒庵『東都茶会記』(淡交社、一九八九年)によれば、箒庵は溝口家旧蔵の香木「白菊」を所持していた。白菊が溝口家からの直接取引による入手か、池田慶次郎による入手かは明らかではない。

(32)

三溪園保勝会編『原三溪と美術』三溪園保勝会、二〇〇九年、七八頁。

(33)

読売新聞、一八八六年四月一五日付。「海画両進会私評」に溝口直

正所蔵の馬遠筆《山水図》について以下のような記述がある。

溝口直正君が愛玩の宋の光宗の朝に書院の待詔さりし馬遠が画ける山水中にあるものなり遠は其頃院中に独歩の人と称せられしものなり荻廬と大きく舟を最も小さく画きたるなど実に非凡なりといふべしとふしぎや此時虚空に花降り異香薫じ満場忽ち

極楽世界の躰相と現出す

(34)

前掲註(32)、八二—八三頁。

(35)

明治三十六年三月一五日より七月一二日まで、京都美術館において開催された。

(36)

京都美術協会『旧義裝飾十六色図譜解説書』、京都美術協会、一九〇三年、二頁。



- (37) 熊谷直行、猪熊浅磨『旧儀裝飾十六式図譜』、京都美術協会、一九〇三年。
- (38) 前掲註(13)。
- (39) 明治年間における溝口直正の動向は以下のようになる。
- 明治二年 直正、新発田藩知事となる。
- 四年 (廃藩置県)
- 一年 長男直亮誕生する。
- 一二年 直正、宮中祇候に就任する。
- 一六年 直正、式部寮御用掛に就任する。
- 一九年 直正、式部職に就任(同年六月退職)。
- 二二年 久美子(直正次女)、大倉喜八郎長男、喜七郎と結婚。
- 二四年 直正、中村谷五郎(旧新発田藩士)より藩主家への貸付金および立替金七万余円の請求訴訟として訴えられる。
- 三一年 直正、赤坂氷川町に転居する。
- 三〇年 その前後に個人取引により、家蔵の茶道具等を高橋箒庵や原三溪に売却する。
- 三六年 直正、京都において古美術展覧会において抹茶席(濃茶と薄茶)を担当する。
- 三七年 東京両国の中村楼において売立を開催する。このときの札元は梅澤安蔵と池田慶次郎である。
- 四〇年 直亮(直正長男)、徳川達孝長女、須美子と結婚。
- (40) 読売新聞、明治三六年一月二日付。「溝口伯の菊花」の項参照。
- (41) 読売新聞、明治二四年六月二八日付。「溝口家に係る訴訟」の項参照。
- (42) 溝口三郎『大倉集古館の漆芸』、『溝口三郎遺稿集』、『溝口三郎遺稿集』刊行会、一九八六年、八七―八八頁、東京都立図書館蔵。
- (43) このほか大倉家が所蔵した溝口家旧蔵品では、狩野探幽筆屏風が

ある。この屏風は、久美子の夫である喜七郎の父、大倉喜八郎の別荘にあった調度品である。

(44) 茶の湯文化学会大会において口頭発表した際の、学会会長熊倉功夫氏、同会副会長田中隆氏の教示による。

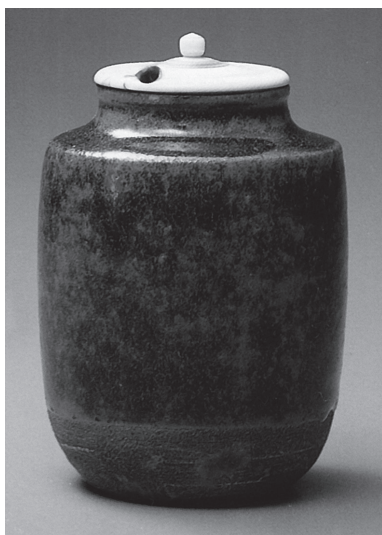
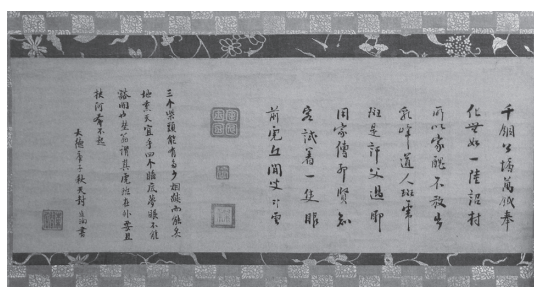


图3) 瀬戸茶入《大概》(個人蔵)



图1) 《織部沓茶碗》(個人蔵)



千個生陽萬鐵松  
 化無如一陸詔村  
 所以家醜不放出  
 乳峰道人斑虎  
 斑是許父過耶  
 用家傳印賢知  
 客試着一隻眼  
 前虎丘 問叟法雲

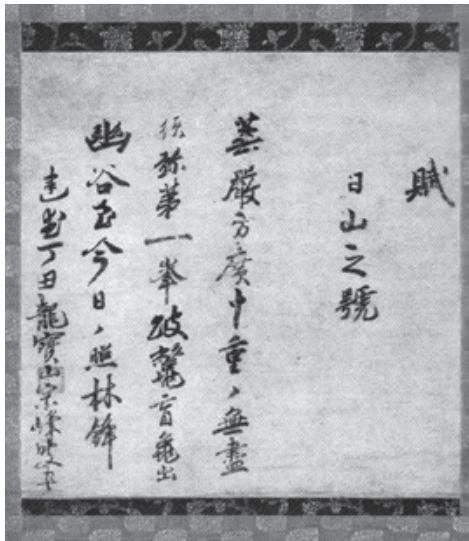
三个柴頭能有多少烟燄而能灸  
 地熏天宜乎四个睡底夢眼不能  
 豁開也埜翁謂其虎斑在外要且  
 扶阿爺不起

大德庚子秋天對  
 道洵書

图4) 《閑極法雲·東澗道洵兩筆墨蹟》(個人蔵)

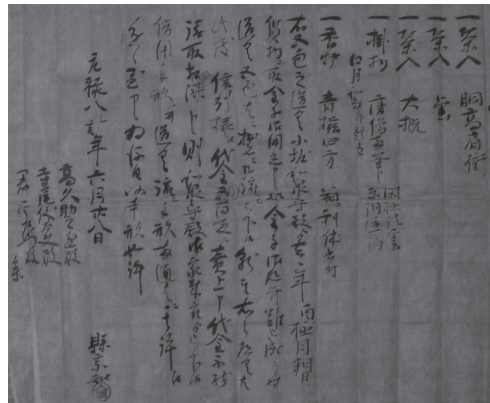


图2) 古瀬戸茶入《溝口胴高》(個人蔵)



賦  
日山之號  
華嚴方廣中重々無盡  
須弥第一峯跛驚盲龜出  
幽谷正今日之照林錡  
建武丁丑 龍寶山宗峰叟書

図6) 大燈国師墨蹟《日山之賦》(個人蔵)



一 茶入 洞高肩衝  
一 茶入 大瓶  
一 掛物 唐僧兩筆  
一 香炉 青磁四方  
一 箱二利休書付  
右五色之道具小堀和泉守殿方去々年西極月朔日二  
質物二取金子御用立申候処、金子御返并難被成候二付  
道具五色共二拙者へ御流し被下候就者右之道具共  
此度信州様江代金五百兩二売上申候代金不殘  
請取相済申候則和泉守殿御家來衆方被下候  
借用手形并並道具流シ手形兩通共二其許江  
進置申候為後日仍手形如件  
元禄八乙亥年六月二十八日 懸宗知  
高久助之進殿  
寺尾儀太夫殿  
君宇左衛門殿

図5) 古瀬戸茶入《溝口洞高》に付属する懸宗知添状(個人蔵)



図7) 古瀬戸茶入《徳永肩衝》(個人蔵)



図8) 伝雪舟筆《四季山水図巻》(京都国立博物館蔵)

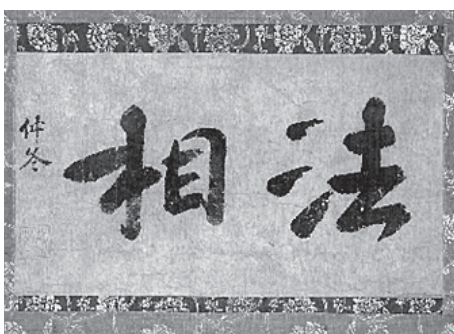


図10) 蘭溪道隆墨蹟《法相》(個人蔵)



図9) 《長生殿蒔絵手箱》(大倉集古館蔵)

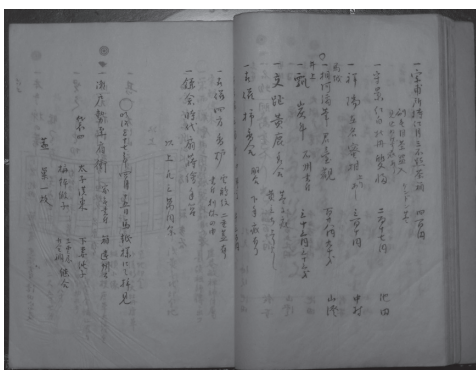
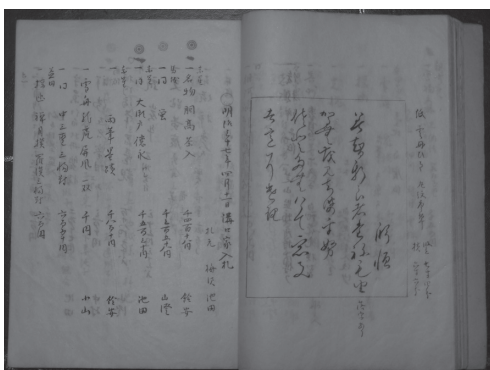


図11) 写本『つれづれの友』(個人蔵)

井上馨の知遇を受けた松山喜太郎による見聞録などをまとめた『つれづれの友』を息子の米太郎が書き写した。その内容は『大正名器鑑』にも引用された。明治期の道具移動史を研究するうえで重要な資料である。(個人蔵)

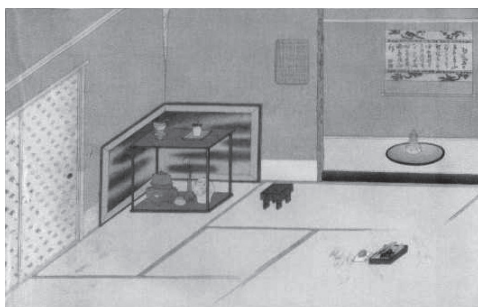
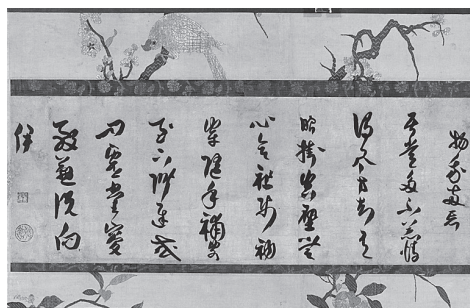


図12) 古美術展覧会における溝口直正による抹茶席の全景。床の間に《物我両忘》墨蹟が確認できる。表具も正確に写されている。



物我両忘  
 居常多不器情  
 謂盡方知有  
 眼挂空壁無  
 心合祖師衲  
 穿隨手補客  
 至下階遲或  
 問虛堂叟  
 慇懃説向  
 伊 印 印

図13) 大燈国師墨蹟《物我両忘》  
 (個人蔵)

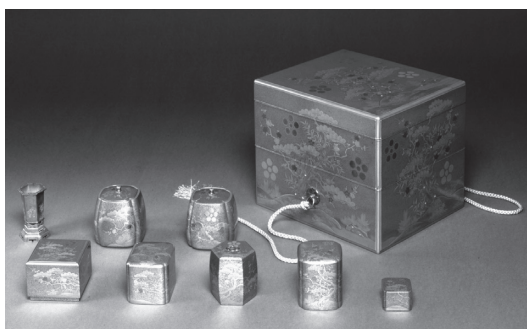


図14) 《松竹梅蒔絵十種香箱》(大倉集古館蔵)

【表1】 溝口家所蔵品における下賜品と献上品

下賜		献上				
時期	西暦	代	当主	理由	作品	出典
天正年間中	1573 1593	初代	秀勝	(不明)	豊臣秀吉より御陣羽織。	『宝廟記』
慶長5年8月18日	1600	初代	秀勝	豊臣秀吉遺物	前田家において秀吉遺物として来国光の御刀。	『宝廟記』
元文2年5月28日	1737	六代	直温	若君七夜祝	將軍家より美濃兼升のさしぞへ。	『徳川実紀』
寛文12年9月28日	1672	三代	宣直	致仕	來國光の刀。	『徳川実紀』
宝永3年7月19日	1706	五代	重元	家督相続	公方様へ、御太刀一腰、綿百把、御馬一疋。 大納言様へ、御太刀一腰、御馬一疋。 御台様へ、白かね二十枚。 御簾中様、白かね十枚。	『陽廟記』
宝永3年7月28日	1706	四代	重雄	致仕	城州兼永の刀を奉る。 御臺所に冷泉大納言爲尹卿筆の古今和歌集。 大納言殿に備前重眞の刀。 簾中御方に冷泉大納言持爲卿筆の後撰和歌集。	『徳川実紀』
宝永6年5月11日	1709	五代	重元	徳川家宣將軍宣下	御太刀、馬代。	『陽廟記』
享保4年1月15日	1719	六代	直治	家督相続	御太刀一腰、御馬一疋、御時服十。	『大廟記』
享保4年1月25日	1719	六代	直治	五代重元遺物	青江助次の刀。	『徳川実紀』
享保17年7月21日	1732	七代	直温	家督相続	御太刀、巻物、金、馬代。	『浄廟記』
享保18年1月7日	1733	七代	直温	出雲守任官	御太刀、馬代。	『浄廟記』
宝暦11年2月15日	1761	七代	直温	隠居	御太刀、御巻物、御馬代。	『御当代記』
宝暦11年2月15日	1761	八代	直養	家督相続	御太刀、御巻物、御馬一疋。	『御当代記』
宝暦12年11月1日	1762	八代	直養	若君七夜祝	兼友のさしぞへ。	『徳川実紀』

天保9年9月12日	1838	十一代	直漣	家督相続	御太刀、御巻物、黄金、御馬。	『誠廟記』
天保9年8月5日	1838	十代	直諒	隠居	御太刀、馬代、御巻物。	『誠廟記』
天保9年7月1日	1838	十代	直諒	世子君御参観の御札	御太刀、馬代、蠟燭。 大御所様、大納言様へも御太刀馬代。	『見廟記』
享和2年11月15日	1802	十代	直諒	家督相続	御太刀、御巻物、黄金、御馬。	『見廟記』
寛政4年11月23日	1792	九代	直侯	出雲守任官	御太刀、馬代。	『修廟記』
天明6年11月15日	1786	九代	直侯	家督相続	御太刀、御巻物、黄金、御馬。	『修廟記』
天明6年11月15日	1786	八代	直養	隠居	御太刀、馬代、御巻物。	『修廟記』

【表2】 高橋箒庵の所持した溝口家旧蔵品

凡例

一、売立目録を中心に高橋箒庵所蔵品中、溝口家伝来品を抽出した。  
 一、これらの総数は五六件であるが、個人取引によつて取得したとする五〇数件の作品の大半を占めると考える。  
 一、出典は以下の文献とする。

『大正名器鑑』大正一〇年から一五年にかけて発刊。  
 『近世道具移動史』昭和四年発刊。  
 『東都寸松庵主所蔵品』明治四五年五月二七日開札。於京都美術倶楽部。  
 『高橋家所蔵品入札』大正七年四月五日。於東京美術倶楽部。  
 『水戸徳川家音羽護国寺並二某家御蔵品入札目録』大正一〇年一月二八日開札。於東京美術倶楽部。  
 『一木庵高橋家所蔵品入札』昭和五年十月二七日開札。於東京美術倶楽部。  
 『内田家某家所蔵品入札』昭和七年一〇月三一日開札。於東京美術倶楽部。  
 『茶杓図譜』(東京大学史料編纂所蔵)は、溝口家伝来の茶杓を十代藩主直諒の時代に、原寸大で書き写したものである。  
 『秀粹』(日本美術協会、一九〇八年)には伯爵溝口直正の所蔵品がある。  
 『香取秀真』(茶器中の金物類)『茶道全集(巻の14)』所収。

高橋箒庵所蔵品の一覧

1	番号	『大正名器鑑』	丹波茶入 銘紅葉	作品名	所載項	第五編下	図版	○	落札価格 (単位円)	備考
	所載誌									

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	『東都寸松庵主所蔵品』	”	”	『近世道具移動史』	”	”
朝鮮菱形水指 宗中箱書付 溝口家旧蔵	作州公茶杓 筒石州 銘うき雲	染付六角十支香合 溝口家旧蔵	保元時代扇八ッ橋青貝入香合 溝口家旧蔵	染付菱形芦葉達磨香合 溝口家旧蔵	染付切子香合 遠州箱 溝口家旧蔵	染付台布袋香合 溝口家旧蔵	破風窯茶入 銘亀甲 溝口家旧蔵 袋焼切	日観 葡萄図横物 探幽常信極 溝口家旧蔵 縦六寸七分×横二尺三寸三分	安信左芦雁、探幽中渡川布袋、尚信右芦雁溝口家旧蔵 縦四尺一寸×横一尺四寸	元信 松下牧童 常信外題 溝口家旧蔵 縦三尺四分×横(一)尺二寸五分	啓書記 李白觀瀑図	保元時代扇面杜若模様香合	伯庵茶碗	織部杳茶碗	宗節伯庵茶碗
二三四	二〇七	一九一	一九〇	一八九	一八七	一八六	一三九	七七	三八	二九				第八編	第八編
			〇		〇	〇		〇	〇	〇				〇	〇
			七千												
	『茶杓図譜』所載。		↓5の保元時代扇面杜若模様香合に同じ。									↓現在、根津美術館蔵。	↓2の宗節伯庵茶碗に同じ。	現在、個人蔵。	現在、泉屋博古館分館蔵。



34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	『高橋家所蔵品入札』	”	”	”	”
家旧蔵 時代鉄象眼入角形鍔 徳元作 溝口	備前白雲水指 宗中箱書 溝口家旧蔵	伊部香炉 溝口家旧蔵	唐物象牙茶器 溝口家旧蔵	織部硯 銘秋の山 蓋石州筆 溝口家旧蔵	霜降鴻羽箒 宗中箱書 溝口家旧蔵	黒鶴羽箒 大膳政之箱書 溝口家旧蔵	清巖自造茶碗 溝口家旧蔵	蕎麦茶碗 銘むさしの 溝口家旧蔵	染付茶碗 銘腰あられ 白酔庵箱 溝口家旧蔵	菊屋大海 溝口家旧蔵	紅葉 光琳筆金地盛上極彩色菊花二枚折屏風 半双溝口家旧蔵 裏光琳筆銀地	中峰明本墨蹟 了意極 溝口家旧蔵 豎一尺×巾一尺三寸九分	州色紙添須野不堪作 溝口家旧蔵 月二群千鳥蒔絵硯箱 石州歌意 石	乾山桔梗画乱箱 溝口家旧蔵	光琳水葵蒔絵乱箱 溝口家旧蔵	呉須獅子蓋香炉 白酔庵箱書付 溝口家旧蔵
三八八	三五五	三四八	二九九	二五六	二三七	二三六	一七二	一六六	一五五	一四〇	一二六	六九	三四六	三五五	三五四	二五五
				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
				二千九百						三千三百三十六	二万		二千六百			二千五百五十九
				『秀粹』には「青織部焼硯銘秋の山」として所載。												

53	『一木庵高橋家所藏品入札』																			
52	〃	織部杓茶碗 箱書付織部 溝口家伝来	独楽中次 溝口家伝来																	
51	〃	青磁三足水盤 溝口家伝来	青磁三足水盤 溝口家伝来																	
50	〃	香木一箱 雲梨子地箱入 溝口家伝来	香木一箱 雲梨子地箱入 溝口家伝来																	
49	〃	黒地富士蒔絵小硯箱 溝口家伝来	黒地富士蒔絵小硯箱 溝口家伝来																	
48	〃	唐物黒無地州浜形小卓 溝口家伝来	唐物黒無地州浜形小卓 溝口家伝来																	
47	〃	古銅二閑人蓋置 溝口家伝来	古銅二閑人蓋置 溝口家伝来																	
46	〃	古銅人物筆架 溝口家伝来	古銅人物筆架 溝口家伝来																	
45	〃	伊部こぼし 溝口家伝来	伊部こぼし 溝口家伝来																	
44	〃	織部筋花入 観阿箱 溝口家伝来	織部筋花入 観阿箱 溝口家伝来																	
43	〃	伊賀捨石香合 溝口家伝来	伊賀捨石香合 溝口家伝来																	
42	〃	鎮信公共筒茶杓 銘清風 溝口家伝来	鎮信公共筒茶杓 銘清風 溝口家伝来																	
41	〃	繪瀬戸柿香合 篷露箱 溝口家伝来	繪瀬戸柿香合 篷露箱 溝口家伝来																	
40	〃	利休茶杓 筒石州作直シ 溝口家伝来	利休茶杓 筒石州作直シ 溝口家伝来																	
39	〃	遠州公 連歌 宗中公箱 溝口家伝来 縦八寸八分×中一尺五寸	遠州公 連歌 宗中公箱 溝口家伝来 縦八寸八分×中一尺五寸																	
38	〃	和漢四句 松花堂、澤庵、江月、遠州了意了音外題 観阿箱 溝口家伝来 縦九寸四分×中一尺四寸二分	和漢四句 松花堂、澤庵、江月、遠州了意了音外題 観阿箱 溝口家伝来 縦九寸四分×中一尺四寸二分																	
37	『水戸徳川家音羽護国寺並二某家御藏品入札目録』	秀吉公 かな文 溝口家伝来 縦六寸×中一尺四寸	秀吉公 かな文 溝口家伝来 縦六寸×中一尺四寸																	
36	〃	存星筆 外二本 象牙二本 計五本 溝口家旧蔵	存星筆 外二本 象牙二本 計五本 溝口家旧蔵																	
35	〃	青磁雲龍硯屏 溝口家旧蔵	青磁雲龍硯屏 溝口家旧蔵																	
				五二	〇	千五百九十一	↓3の織部杓茶碗に同じ。													
				四三一	〇															
				三四〇	〇															
				三〇九	〇	二千百十														
				三〇五	〇															
				三〇〇	〇	千六百二十九														
				二六八	〇															
				二六七	〇															
				二五三	〇															
				二四四	〇															
				二〇八	〇															
				二〇六	〇															
				一九六	〇															
				一三九	〇															
				四三	〇															
				三八	〇	千百														
				三二	〇															
				四三五																
				四三二																

		席名	作品名	作者
		歌会飾	三重歌画筆筒 真柴垣蒔絵	
		抹茶席飾	大燈国師墨蹟 物我両忘	
		(紹鷗好四畳半茶室)	香炉 青磁七層塔	
			盆 曲輪	
			真台子	
			風炉釜 唐物切合 道也作	
			水指 染付手桶形	
			杓立 唐銅	
			火箸 砂張象眼	
			建水 南蛮素焼	
			蓋置 古銅二閑人	

【表3】 溝口家が古美術展覧会に出品した作品 (明治三六年三月二十五日〜七月二日、於京都市美術館)

59	58	57	56	55	54
〃	『内田家某家所藏品人札』	〃	〃	〃	〃
青鷲掛羽箒 宝甫箱	古銅桃底花入 紹鷗所持 朱四万盆添	独楽菓子盆 箱書付遠州 溝口家伝来	時代 桑柄灰匙 箱書付白酔庵 溝口家伝来	御本兔耳香炉 白酔庵所持 溝口家伝来	佐川田喜六共筒茶杓 銘都鳥
一三一	一一三	一三一	一二三	七七	六八
○	○	○	○	○	○
千二百九十	三百	二千八百十		千三百九十	
	『茶器中の金物類』には「紹鷗桃底花入 伯爵 溝口直正蔵」とある。				出典『茶杓図譜』。



彫刻物		書画類																			
能楽面 六十七個ノ内 四十七個	四睡図（二幅）	大燈国師書摸本（二幅）	翁	大癒見	小尉	増髪	姥	中将	山姥	小面	猿飛出	頼政	弱法師	鷹	狸々	長靈癒見	童子	小飛出	般若	孫四郎	景清
	松花堂筆 玉寶讚	澤庵和尚筆	日光作	福来作	小牛作	友永作		井関作				寶来作	友永作	春若作		友永作		徳若作		友永作	日永作

髹漆蒔絵器具類	若狭塗盆	
	青貝州浜卓	
	堆黒丸盆	
	堆朱香合	
	波貝画蒔絵中次	
	真塗長板	
金属器類	古銅経筒 廣治銘	

ENGLISH SUMMARY

**An Investigation into the Sale of the Mizoguchi Collection During the Meiji Period:Based on *Tsurezure-no-tomo* and *Uritate* Auction Catalogues**

MİYATAKE Yoshiyuki

In the Edo period, the *Mizoguchi* House governed the *Shibata-Niigata* district. In Meiji 37, items from the *Mizoguchi* House were sold off. However, very few records from those days remain. A writer discovered *Tsurezure-no-tomo*, which is a document articling the sale of items in the Meiji Era. *Tsurezure-no-tomo* was written by *Ginsho-an*, *Kitaro Matsuyama*. In a part for a main subject, the background out of which the tool of *Mizoguchi* house flows *Tsurezure-no-tomo* into reference is discussed.

*Key Words*:Naomasa Mizoguchi, Shibata-han, Tsure-zure-no-tomo, Soan Takahashi, Uritate